

## 福井史料ネットワークの活動から見えてきたこと

長野 栄俊\*

はじめに

1. 福井史料ネットワークの発足まで
2. 福井史料ネットによる現地調査
3. 問題点その1 「現地主義」の持つ限界
4. 問題点その2 福井県における史料保存運動
5. おわりにかえて 「現地主義」の復権と文書館に寄せる期待

はじめに

2005年2月6日に開催された第8回福井県史研究会研究大会で、筆者は福井史料ネットワーク（以下「福井史料ネット」という）の活動について口頭報告を行った。福井県文書館（以下「文書館」という）から、この時の報告内容を活字化する話を頂いたが、これと前後して筆者を含めた史料ネットのメンバーが、様々な場において活動内容に関する口頭報告<sup>1)</sup>や論稿の発表を行っている。また、2005年6月25日には、敦賀短期大学を会場にして福井史料ネット主催のシンポジウム「史料の被災と救済・保存」が開催され、福井史料ネットの活動として一つの区切りを付けた（シンポジウムの記録集が近刊の予定<sup>2)</sup>）。そこで、本稿ではそれらとなるべく重複しない限りにおいて、福井史料ネットの活動および活動の中で見えてきた諸問題について論じてみたい。なお、福井史料ネットの活動については、次に掲げる雑誌等に発表された福井史料ネット・メンバーの論稿、シンポジウムの記録も併せて参照してほしい。

[ 1 ] 長野栄俊「福井史料ネットワークの活動について」

（『北陸史学会会報』第7号、2004年10月）

[ 2 ] 松浦義則「福井史料ネット 中間総括」

ホームページ「福井史料ネットワーク情報」に2004年8月22日アップ）

（[http://www.lit.kobe-u.ac.jp/macchan/fukui\\_tyukan.htm](http://www.lit.kobe-u.ac.jp/macchan/fukui_tyukan.htm)）

[ 3 ] 澤博勝「福井史料ネットワーク、半年間の成果と課題」

（『史料ネット News Letter』第40号、2005年3月）

[ 4 ] 澤博勝・多仁照廣・長野栄俊・柳沢芙美子「福井史料ネットワークの設立と活動」

（『歴史評論』第666号、2005年10月）

[ 5 ] 多仁照廣「福井史料ネットワークの活動と史料救済の課題と展望」

（『アーカイブズ』第22号、2006年1月）

[ 6 ] 『シンポジウム「史料の被災と救済・保存」記録集（仮題）』（2006年春発行予定）

---

\* 福井史料ネットワーク、福井県立図書館主査（司書）

この他、福井史料ネットの活動に参加した歴史資料ネットワーク（代表：奥村弘氏。以下「神戸史料ネット」という）のメンバー諸氏も参加記を著している。併せて参照されたい。

[ 7 ] 奥村弘「水害における史料ネットの役割を考える」

（『史料ネット News Letter』第38号、2004年9月）

[ 8 ] 松下正和「福井史料ネットワークの被災史料調査活動の現状 水害による被災の特徴」

（『史料ネット News Letter』第38号、2004年9月）

[ 9 ] 山本陽一郎「福井集中豪雨」に関する資料保存作業に参加して」

（『史料ネット News Letter』第39号、2004年10月）

[ 10 ] 浅利文子「福井の車窓より」

（『史料ネット News Letter』第39号、2004年10月）

## 1. 福井史料ネットワークの発足まで

2004年7月17日～18日、福井県嶺北地方は局地的な豪雨に襲われ、足羽川流域を中心に各地で堤防の決壊・溢水、土砂災害など甚大なる被害をもたらした。後に「福井豪雨」と名付けられたこの自然災害の凄まじさは『7・18福井豪雨 報道記録集』（福井新聞社編集発行、2004年10月）に生々しく記録されており、『記録 福井豪雨 みんなでレポート』（ゆきのした文化協会編集発行、2004年9月）や『7・18、あの日』（福井豪雨を考える会編集発行、2005年7月）、『その時、わたしは...』（福井市教育委員会編集発行、2005年3月）などの体験文集等でも、被災者が味わうことになった恐怖や復旧への思い等を知ることができる。

さて、災害発生1週間後の7月25日、神戸大学に事務局を持つ神戸史料ネットからの呼び掛けにより、福井豪雨における歴史資料の救出を目的とした福井史料ネットが発足する（代表：松浦義則福井大学教授、副代表：多仁照廣敦賀短期大学教授）。発足までの経緯については、表「福井史料ネット活動記録」および先に掲げた諸論稿で詳細に述べられているので、そちらを参照してほしいが、この1週間にも神戸史料ネットおよび文書館は、歴史資料保全のための様々なアクションを取っていたことを紹介しておきたい。

神戸史料ネットは7月21日に文書館と連携し、福井県内の各報道機関に対して「福井豪雨被災地における古文書等資料の救出のお願い」というFAXを流した（翌22日の福井新聞で「古文書捨てないで 汚れても歴史的価値 神戸の団体保存方法を出張相談」として掲載。文書館ではホームページにFAXと同内容の「お願い」をアップ<sup>3)</sup>）。また22日には各ボランティア団体にも「歴史的、文化的資料と遺産への配慮のお願い」のFAXを送信している。一方、文書館では県史編さん事業（1978～1996年）および文書館の開館（2003年2月1日）準備等で蓄積されていた歴史資料所蔵者情報をもとに、人的ネットワークを通じての歴史資料の安否確認を行った。

筆者は福井市内において生活復旧ボランティアに参加したが、その過程で災害発生から非常に短期間のうちに、被災した家財道具一般が躊躇なく廃棄されるのを頻りに目にした（中には箆笥や襖といった歴史資料が保存されることの多い容器も多数含まれていた）。また、その後の福井史料ネットの現地聞き取り調査によっても、災害が発生してから、廃棄まで含めた復旧作業への取り掛かりが素早く行われていたことを知った。そのような意味で、神戸史料ネットおよび文書館がとった初動は、今

回のような水害の場合、特に的確かつ有効であったと評価できる。

## 2. 福井史料ネットによる現地調査

7月25日、福井史料ネット発足のための打ち合わせの場において、神戸史料ネットからのアドバイスにより、速やかに現地調査を開始することが方針として決められた。

この現地調査に先立つ作業として、被災地域における歴史資料所蔵者（以下「所蔵者」という）を把握する作業が進められた。所蔵者把握作業は、主に筆者が担当することになったが、最も苦勞した点は、災害発生時における所蔵者が誰であるかを確認することであった。詳細は文献 4 ]で述べたので繰り返さないが、最大の問題点は「災害が発生した時点において、どこの誰がどのような歴史資料を所蔵しているか」を誰も（どの機関も）正確に把握できていないことであった。結局は1970～80年代に公刊された古文書目録等を下敷きに作業を進めることになったが、被災地区内にどれだけの所蔵者がいるのか、その全貌を把握するのに10日以上時間をかけることになった（最終的に把握できた所蔵者の数は584件）。つまり、福井史料ネットが所蔵者に対して、何らかの接触を試みようにも、何もできない時間が10日間もあったということになる。

以上のような準備を経て、福井史料ネットでは12回にわたる現地調査を行った（個々の現地調査の概況についてはホームページ「福井史料ネットワーク情報」を参照<sup>4)</sup>）。参加者人数は、のべ人数で約50名、主な参加者は福井史料ネット発足時のメンバーである県内大学・短期大学の教官・大学院生および博物館・文書館・図書館等の歴史資料利用保存機関の職員であったが、神戸史料ネットのメンバーや金沢大学の教官・大学院生の参加も見られた。調査過程では、幸いにも所蔵者宅において被災した歴史資料に出会うことはほとんどなく、福井史料ネットでの調査結果に限って言うならば、福井豪雨によって歴史資料が被害を蒙った例はほとんどなかったとすることができる。その要因については、メンバー諸氏が考察・言及しているように、所蔵者宅が水害に強い立地条件を有していたことや保管場所が二階などの高所であったことなど、幸運な条件が重なったものと言えるが、もちろん福井史料ネットが把握できなかった被災史料もあったはずである。

福井史料ネット発足から約1か月後の8月22日、6回にわたる現地調査を踏まえた結果、確認できる限りでは被災した歴史資料はほとんど無く、また今後とも緊急性を要する歴史資料のレスキューが発生する可能性は低い、との判断がなされ、今後の活動方針も含めた「福井史料ネットの中間総括」がホームページ上にアップされることになる[ 2 ]。この中でも触れられている通り、福井史料ネットの現地調査の中で、「史料の被災と救済」という問題とは直接に関わりはないものの、「史料の保存」という問題に関して大きな課題がいくつか見えてきた。以下、それらの問題について私見を述べてみたい（以下に述べることは、あくまで筆者個人の私見であり、福井史料ネットの公式な見解ではないことを断っておく）。

### 3. 問題点その1 「現地主義」の持つ限界

福井史料ネットの現地調査参加者の多くが経験したことであるが、「古文書は無事でしたか」という所蔵者への問いに対し、「所在がわからない」「存在自体を知らなかった」とする回答が多く見られ

た。中には「廃棄してしまった」というケースさえみられた。家族や地域共同体を含めた社会構造の変化、生活様式の変化、また個人的な関心の所在など、様々な要因が複合的に絡み合った結果であろうが、無関心ゆえに数百年来伝来してきた歴史資料がここ数十年の間に廃棄されてしまったり、行方がわからなくなってしまうケースが想像していた以上に多かった。その意味で、歴史資料は福井豪雨という天災で滅失するより以前に、人災によって滅失していたケースもあったと言えよう。この問題点が露わになるに従い、福井史料ネットでの活動目的も、緊急性のある「救出」から、漸次、保存にむけた「啓発」活動にシフトさせる必要があるのではないかと、とする議論もメンバーの間でなされた。

歴史資料を含めた文化財の保存と利用に関しては、それが発生し、保管されてきた現地で保存され、利用されるべきとする「現地（保存）主義」という考え方がある。特に歴史資料に関しては、1964年、旧帝国大学系大学にブロック内の歴史資料を集めて管理しようとした「日本史資料センター構想」が打ち出されると、これに対する地方の研究者等による反対運動の中で、この「現地保存主義」が提唱されるようになった。後に日本学術会議によって出された「歴史資料保存法の制定について（勧告）」（1969年11月1日）においても、「第2 保存措置の大綱」として「歴史資料は、現地において現物のまま保存することを原則とする。」との考えが明示されている<sup>5)</sup>。

この主義の持つ理念は正しく、そしてこれからも歴史資料保存の現場でこの主義は堅持されていくべきものと、筆者自身も考える。しかし、実際の「現地」にこの考え方はどの程度浸透しているのだろうか。先に見たように、所蔵者の間に広がる歴史資料への無関心は、決して現地での保存、そして利用には結びついていないのが実情である。残念ながら、こうした事態を惹き起こした一つの要因が、これまでの自治体史編纂事業のあり方にあったことは否めない。編纂事業が終わりに近づく頃に問題となるのは、編纂過程で撮影したマイクロフィルムや作成した複製本を、いかにして今後も利用できるようにするか、といった「利用」の側面であって、歴史資料そのものの「保存」が問題となることは少ない。編纂事業終了後も現地で「保存」され続けていくはずの歴史資料に対して、何らかの措置をとってきた事業がこれまでどの程度あったのだろうか。福井史料ネットの現地調査でも「史編さんの調査で資料を見せてもらったことがあると思うのですが」と切り出すと、「史が刊行されたから、もう不要と思って廃棄した」「史には載らなかったから、大したものではないと思う」などという答えが返ってきたことがあった。これでは、何のため、誰のための自治体史編纂事業だったのか。

自治体史編纂事業において、現地保存のために手間隙をかけようと思えば、例えば撮影後の歴史資料を1点ずつ中性紙の保存容器に入れて整理し、目録を渡すなどの方法が考えられるが、時間的・財政的な事情がそれを許さないであろう。しかし、現地の所蔵者や住民に、現地での保存に意識的でもらうためには、さほど手間やお金をかけずともできることがあるのではないだろうか。例えば、現地でのマイクロフィルム撮影後に、簡単な保存の方法を書いた紙を一緒に渡してあげるとか、その家の歴史資料がどのような形で編纂に役立ったのかを簡単に伝えてあげるとか、方法はいくらかもあるだろう。最も低コストかつ効果的な方法は、編纂事業終了後も何年かに一度は現地で保存されている歴史資料の安否を問う通知を、所蔵者に出すことが考えられる。しかし、首長部局で主管されること

の多い編纂事業が終了した場合、どの部局でそれを引き継ぐのか（例えば教育委員会の文化財担当）といった縦割り行政の問題点も生じてくるかもしれない。行政がいわゆる「民間所在史料」に対し、どこまで関与していけるのか、といった問題とも関わってくるが<sup>6)</sup>、真の意味での「現地保存主義」の復権を図っていくために、行政が関わっていける余地はまだ残されていると考える。

#### 4. 問題点その2 福井県における史料保存運動

次に福井史料ネットへの参加者の問題、そして地方における歴史資料保存運動の問題を考えてみたい。

福井史料ネットの活動には、残念ながら純粋な意味での市民・住民からの参加者は見られなかったし、またこれまで福井県の地域史研究に関わってきた研究者の直接的・積極的な参加もあまり見られなかった。ネットの活動に参加していたメンバーの中にも、半ば職務との関連から生じる義務的な思いから参加した者も少なからずいたものと推測される。かく言う筆者も、常日頃から歴史資料の保存について心を砕いていたわけではなく、またこの種のボランティア活動に対しても、深い理解と積極的な賛意を示していたわけでもなかった。たまたま自宅も職場（県立図書館）も被災することはなかったという大前提にたった上で、日ごろ職務として歴史資料を扱うこともあるのだから、何かできることはないだろうか、といった程度の動機で活動に参加してきた。

もちろん福井史料ネットの活動に参加する方法は、実際に現地調査に加わることだけではなかった。神戸史料ネットからの全国への呼びかけや、福井県史研究会・北陸史学会の会員への呼びかけにより、50万円を超える活動資金が寄せられた。全くゼロからスタートした福井史料ネットの活動においては、非常にありがたく心強い支援であった。

しかし、ここでは敢えて問うておきたいと思う。なぜ福井史料ネットの活動がさしたる盛り上がりも見せることなかったのか、また地元の研究者や住民を巻き込んだ形で活動が展開されなかったのかを。第一の要因は、これは心から喜ぶべきことなのであるが、実際に被災した歴史資料が出てこなかった、ということに拠るところが大きいのだろう。このような仮定は不謹慎であるが、仮に被災した歴史資料が続々と出ていたのであれば、活動に直接参加された方も多かったに違いない。第二の要因としては、福井県では組織化された歴史資料の保存運動が展開されてこなかったという歴史をあげることができよう。以下、この第二の点について考えてみたい。

福井県では昭和30年代の開発ラッシュに伴う遺跡の破壊をうけ、福井考古学研究会（1962～71年）や福井の文化財を考える会（1975～88年）が発足し、文化財の保存運動が展開された<sup>7)</sup>。しかし、ここで運動の目的となったのは、まさに眼前で進められていた文化財＝遺跡の破壊を防ぐことであって、密かに滅失していたかもしれない古文書等の歴史資料が保存運動の対象とされることはなかった。一方、1971～73年には県立図書館が中心となって県下の古文書所在調査が行われ、その結果は『福井県古文書所在調査報告書』として1979年3月に刊行されることになった。この報告書の「序」には「近年農山漁村の社会的変化によって古文書の移動・散逸が顕在化している。このような憂慮すべき現状に対して積極的な対策が講じられなければならないが、それにはまず県下における古文書の実態と分布状況が解明されなければならない。」と、その調査目的が述べられている。この報告書が県史編さ

ん事業の基礎作業として位置付けられ、広く「利用」されたことはよく知られているが、残念なこと  
にこの報告書を元にして直接的に「憂慮すべき現状」の打開が図られたという事例を、筆者は寡聞に  
して知らない。

平野俊幸氏も指摘していることだが、地元研究者の層の薄さが、地元歴史研究団体をして歴史資料  
保存運動に展開させなかったものであり、またこうした組織だった運動を踏まえずして、文書館が設置  
されたという経緯も、福井県における歴史資料保存に対する関心の薄さを導き出したとは考えられな  
いだろうか<sup>9)</sup>。もちろん戦後、個々の研究者の良心的な行動のおかげで、廃棄目前の歴史資料が、県  
立図書館やその他機関等で緊急的に保管され、保存に至った事例は何例もあげられる。しかし、一般  
的に言って、自治体史編纂事業においても、個々の研究者の研究活動においても、歴史資料を「保存」  
まで考えて「利用」したという事例は少数派であったことは間違いなからう。

重機で破壊されることが目に見える遺跡等の滅失とは異なり、現地で保存されているはずの歴史資  
料は人知れずひっそりと失われている。そのため保存運動の機運が芽生えなかったこともよくわかる  
が、その意味で今回の水害は現地における史料保存を考えるよい機会となった。しかし、この機会を  
どのように生かし、今後の史料保存に繋げていくかは、福井史料ネットという小さな団体単独の力だ  
けで解決できる問題ではないし、また多くの地域史研究に関わる人々が共有すべき課題と考える。

##### 5. おわりにかえて 「現地主義」の復権と文書館に寄せる期待

福井豪雨という災害を契機に発足した福井史料ネットの活動を通じ、これまではさして真剣に捉え  
られてこなかった歴史資料保存に関する様々な問題が見えてきた。本稿では詳しく触れなかったが、  
所蔵者と研究者、行政の間で、歴史資料をめぐる認識についてギャップがあることも、現地での保存  
を困難にしていると思われる。例えば、ある近代史料について、自治体史編纂に関わった研究者が  
「歴史的に重要」と判断したものでも、所蔵者はそのように認識していない、という場合が往々にし  
てあり、また研究者が重要と判断しても、文化行政サイドではこれを文化財としては未指定であるが  
ゆえ、単なる個人財産には積極的に関与すべきでない、とする考えを持つに至る場合も多い。

きちんと自分たちで保存していきたい、と所蔵者や地域住民が考えているうちは、行政やボランテ  
ィアが関与せずとも歴史資料は現地で大切に保存されていくし、事実、そのようにして歴史資料は今  
日まで伝えられてきた。逆に、所蔵者や地域住民が、自分の家や地域の歴史資料に価値を見出さず、  
また関心を持たなくなった途端、それらは廃棄されたり、災害などを機に滅失したりすることになっ  
てしまう。行政やボランティア、研究者の果たすべき役割というのは、所蔵者や現地住民に、現地で  
歴史資料を持ち続けていきたい、利用し続けていきたい、と思ってもらうための手助け、アドバイ  
スをする事なのではないだろうか。そのために、非常に遠い道のりとはなるだろうが、文書館が果  
たせる役割、果たすべき役割も、まだまだ他に考えられるであろうし、福井史料ネットも今後とも、  
ささやかながら歴史資料の保存問題について考えていきたいと考えている（もちろん、発足当初の目  
的である災害発生時の歴史資料救済についても「意識的」であり続けたい）。

「現地放任主義」を脱却し、真の意味での「現地主義」を復権させることが、歴史資料を次の世代  
に伝えていくことにつながるのだと思う。

## 附録「災害ボランティア活動マニュアル作成事業企画案」

2005年7月6日、福井県総務部男女参画・県民活動課は、災害ボランティア活動を効果的に実施するために、県内の企業、社会貢献活動団体等から広く災害ボランティア活動マニュアル作成にかかる企画案を募集した。福井史料ネットも、災害時における歴史資料救済の重要性などを行政にアピールする意味も込めて、松浦義則代表らが中心となり、ボランティア活動マニュアルの企画案を作成し応募した。評価は、企画案の現実性、専門性、汎用性、事業効果など8つの項目に対して行われたが、残念ながら福井史料ネットの企画案は採用されず、「特定非営利活動法人ふくい災害ボランティアネット」の案が採用される結果となった。否採用の原因は、活動内容の特殊性にあったとも考えられるが、ここで提案した企画内容は、福井史料ネットの今後の活動指針や歴史資料の現地保存の問題、災害時の史料保存利用機関が果たすべき役割などを考える際に、示唆に富む内容を持つものと考え、ネットのメンバーらの了解を得て、本稿に併録することにした。

### マニュアル作成企画内容（福井史料ネットワーク）

#### 編集方針

災害（地震・水害）により貴重な歴史的・文化的資料（古文書、行政・民間史料、文化財などの歴史的史料。以下、「歴史資料」と略称）が被害を受けた場合、ボランティア活動により速やかにそれらを救済するとともに、あらかじめそれらの被害発生時に対応できるように歴史資料の保存状況について基礎的台帳を整備しておく。われわれ福井史料ネットワークは昨年7月の水害により被害を受けた歴史資料を救済する目的でボランティア団体として結成され、別紙に示したように1年間活動してきた。その経験を踏まえ、またこうした活動についての他の被害地や先進的団体の経験に学んで、福井県における災害時の歴史資料の救済や保存のマニュアル作成について提案したい。

#### 構成・掲載項目

##### [ ] 災害に備えての基礎的台帳の整備

1. 歴史資料の現状について把握し（現所蔵者の氏名、住所、保管場所、資料の内容など）、基礎台帳にまとめる。そのためにどのようなやり方をするのが、最も正確で効果的かは研究課題である。
2. 作成された基礎台帳と被害予想地図とを組み合わせ、迅速で効果的な歴史資料の救済活動に役立てる。
3. 日頃から歴史資料所蔵者に史料保存について注意を喚起し、保存についての相談に応じる。
4. 歴史資料を扱うためには専門的知識を必要とするので、通常のボランティアでは対応できないため、あらかじめ県内の歴史研究者・学生・地域史研究団体会員・文化財保護委員などに呼びかけ、組織しておく必要がある。われわれ福井史料ネットワークはその中心として活動したいと考えているが、それを越えた広範な組織であることが望ましい。

##### [ ] 災害時の活動

1. 災害発生より一定期間、行政は人命救出とライフラインの復旧に全力を傾注すべきであり、歴史資料の救出に割く余裕はないと判断されるが、歴史資料も救出が遅れると、永久に失われて

しまう。歴史資料救済のボランティア活動はまさにこうした状況のなかで、活動の存在意義がある。

2. 現地の災害本部による広報活動のうちに、歴史資料が被害を受けても廃棄することなく、また骨董屋などに売却せず、資料救出センターに連絡して欲しいとの趣旨を含めてもらう。そのときにどのような文章とし、必要項目は何かなどは研究課題である。
3. 救出資料（損壊家屋からの避難、水損資料など）を保管し、保存・修復を図るための場所の確保とそのための施設（水害史料のための冷凍庫など）・道具を確保する。そのためには県内の行政施設との協議が必要である。
4. 救出など具体的な活動をする人の割り振り、救出先との連絡、活動日時の決定、交通手段の確保など事務をどのようにこなすか。われわれ福井史料ネットワークの経験では、小規模な活動であればボランティア間の電子メール等で対応が可能であるが、大規模な活動になるとどのようにするかは研究課題である。
5. ボランティア活動であれ、通信連絡費（携帯電話費用など）、学生・院生への交通旅費の支給、資料保存の啓蒙活動、活動経験の交流会などのために活動資金は必要である。われわれ福井史料ネットワークは、その資金は先進的活動団体の支援を受けながら募金活動によってまかなった。今後ともこのやり方は基本方針として維持されるべきと考える。
6. 活動の重点は被害を受けた歴史資料所蔵者の依頼により資料を救出することであるが、歴史資料の被害状況を把握するために、実態調査を行う必要がある。われわれの経験からすれば、現地に赴いて実際に個々の所蔵者について調査をする必要がある。しかしこのやり方では広範囲調査は難しいので、郵送による問い合わせも検討する必要があるだろう。

#### 期待できる効果

1. 地域の先人の歴史や文化を示す資料は災害時には軽視され、廃棄されてしまう可能性があるが、いったん廃棄されると貴重な資料は永久に失われてしまう。歴史資料の早期救出のを目的としたボランティア活動は、そうした資料を災害時にも後世に伝えていく上で重要かつ必要な活動である。
2. 将来の展望としては、歴史資料救出に関する研究を深め、歴史資料を保存・修復するためのさまざまな機械や資材を常備して、応急の歴史資料救出にただちに対応できる体制を構築することをめざす。
3. このボランティアは災害時・平常時をつうじて活動することにより、資料所蔵者やその地域の人々に、資料を保存しその地域の歴史を伝えていこうとする意識をたかめることに役立ちたいと考えている。



表 福井史料ネット活動記録

2004.7.18	福井県嶺北地方を中心に局地的な豪雨（「福井豪雨」）
7.21	歴史資料ネットワーク（以下「神戸史料ネット」）から県文書館に電話 神戸史料ネットについて、FAXの連絡先を文書館とすることについて
7.21	神戸史料ネットから報道関係にFAX 「福井豪雨被災地に歴史資料・文化遺産への注意を喚起する記事掲載のお願い」
7.21	県文書館長から被災地の文化財担当者、資料所蔵者にFAX 「福井豪雨被災地における古文書等資料の救出のお願い」 （後に7.22文書館HPにアップ、7/27県・福井市HPにリンク）
7.22	『福井新聞』 「古文書捨てないで 汚れても歴史的価値 神戸の団体保存方法を出張相談」
7.22	神戸史料ネットからボランティア団体にFAX 「歴史的、文化的資料と遺産への配慮のお願い」
7.25	神戸史料ネット4名が被災地を視察
7.25	神戸史料ネットの呼びかけにより文書館で打ち合わせ [19名参加+新聞記者2名] 福井史料ネットワークが発足（以下「福井史料ネット」） 福井史料ネットのメーリングリスト始まる
7.25	被災地域の史料所蔵者リストアップ開始、史料調査台帳の作成（～8/3）
7.25	神戸史料ネットHP 「福井豪雨被害情報・福井史料ネットワーク活動情報」のページがアップ
7.26	『福井新聞』 「“被災”古文書を救え！保存・修復部隊「福井史料ネット」発足 県、大学、県外団体がスクラム」
7.26	『神戸新聞』夕刊 「水害地に教訓継承 被災史料保全ネット発足 集中豪雨禍の福井 神大助教授ら呼び掛け」
7.27	神戸史料ネットが募金を呼び掛け（HP、ML） 「福井豪雨の被災歴史遺産保全活動への支援募金のお願い」
7.27	『神戸新聞』朝刊社説 「福井豪雨 経験生かし息長い支援を」
7.30	福井史料ネット打合せ [8名参加]
7.30	NHK福井「ニュースファイル」 文書館の史料救出・修復活動に関する報道
8.1	第1回 被災史料現地調査（今立町岡本地区、服間地区）[8名参加+町職員+区長ら]
8.3	福井史料ネット打合せ [6名参加]
8.4	第2回 現地調査（今立町服間地区）[3名参加]
8.4	福井史料ネットから福井県史研究会会員各位へ郵便 被災情報の提供、現地調査参加の呼びかけ。福井でも募金を開始
8.8	第3回 現地調査（今立町南中山地区）[2名参加]
8.9	第4回 現地調査（今立町粟田部地区）[3名参加]
8.9	『史料ネット News Letter』特別号（神戸史料ネット発行） 松下正和「福井豪雨の被災歴史遺産保全活動と支援募金へのご協力をお願いします」
8.10	第5回 現地調査（池田町全域）[2名参加+教育長・教委課長]
8.11	第6回 現地調査（今立町服間地区）[3名参加]
8.18	福井史料ネット打合せ [5名参加]
8.22	福井史料ネットHP 松浦義則「福井史料ネット 中間総括」
8.23	第7回 現地調査（福井市上文珠地区）[3名参加]
8.23	第8回 現地調査（福井市上文珠地区）[3名参加]
9.3	『史料ネット News Letter』38号（神戸史料ネット発行） 奥村弘「水害における史料ネットの役割を考える」 松下正和「福井史料ネットワークの被災史料調査活動の現状 水害による被災の特徴」

2004.9.22	文書整理(今立町立図書館)[8名参加]
9.24	第9回 現地調査(美山町下宇坂地区)[1名参加+文化財保護委員]
9.25	『毎日新聞』福井版 「福井豪雨被災の美山で史料調査 福井史料ネット」
9.27	第10回 現地調査(美山町上宇坂地区)[3名参加+現地文化財保護委員]
10.1	『文書館だより』第4号(福井県文書館発行) 「福井豪雨のあとに 資料保存のために」
10.8	報告:多仁照廣「福井水害と史料被災 「行政とアーカイヴズ」のなかで紹介する」(於:国立公文書館専門職員要請講座)
10.10	『北陸史学会会報』7号 長野栄俊「福井史料ネットワークの活動について」, 募金の呼びかけ
10.21	報告:多仁照廣「災害と史料保存」(於:長野県歴史館「文献史料保存活用講習会」)
10.22	『史料ネット News Letter』39号(神戸史料ネット発行) 山本陽一郎「福井集中豪雨」に関する資料保存作業に参加して」 浅利文子「福井の車窓より」
11.26	第11回 現地調査(鯖江市河和田地区)[2名参加+市職員]
2005.1.6	福井史料ネット打合せ [10名参加] 活動をふりかえって、会計報告、今後の活動方針など
2.6	報告:長野栄俊「福井史料ネットワークの活動について」(於:第8回福井県史研究会研究大会)
3.28	『史料ネット News Letter』40号(神戸史料ネット発行) 澤博勝「福井史料ネットワーク、半年間の成果と課題」
4.2	第12回 現地調査(福井市みのり地区)[3名参加]
6.18	報告:多仁照廣「福井史料ネットワークの活動」(於:平成17年度神戸史料ネット・シンポジウム「風水害から歴史資料を守る」)
6.21	福井史料ネット打合せ [3名参加] シンポジウムの打ち合わせ
6.25	シンポジウム「史料の被災と防災」(於:敦賀短期大学) 基調講演:松浦義則「2004年7月福井水害による史料被害と救済・保存」 報告:長野栄俊「被災状況の現地調査活動、および史料の「現地保存」における問題点」 報告:尾立和則「被災した資料の保存処置」 報告:松下正和「2004年台風23号による水損歴史資料の保全・修復活動について」 パネルディスカッション:司会:澤博勝、パネリスト:松浦・長野・尾立・松下
6.28	『福井新聞』 「福井豪雨から1年資料保存法を探る 敦賀でシンポ」
7.19	福井史料ネット打合せ [3名参加] 「災害ボランティア活動マニュアル作成事業企画案」について
7.27	福井県総務部男女参画・県民活動課の募集した「災害ボランティア活動マニュアル作成事業企画案」に福井史料ネットの案を提出
10.1	『歴史評論』666号 澤博勝・多仁照廣・長野栄俊・柳沢英美子「福井史料ネットワークの設立と活動」
10.1	『地方史研究』317号 村田忠繁「被災史料の救済から何を学ぶのか(シンポジウム参加記)」
10.15 ~10.16	地方史研究協議会、第56回(敦賀)大会(於:敦賀市プラザ萬象) ポスターセッションに参加
12.17	福井史料ネット打合せ [5名参加] シンポジウム記録集の編集方針など
2006.1.27	『アーカイヴズ』22号 多仁照廣「福井史料ネットワークの活動と史料救済の課題と展望」
2.23	報告:柳沢英美子「福井豪雨における福井県文書館の活動」(於:全史料協近畿部会第81回例会「水害と史料保存対策について」)

## 注

- 1) 多仁照廣「福井水害と史料被災 「行政とアーカイブズ」 のなかで紹介する」(2004年10月8日、国立公文書館 専門職員養成講座、於：国立公文書館)、多仁照廣「災害と史料保存」(2004年10月21日、長野県歴史館「文献史料保存活用講習会」、於：長野県歴史館)、長野栄俊「福井史料ネットワークの活動」(2005年2月6日、第8回福井県史研究会大会、於：福井県文書館)、多仁照廣「福井史料ネットワークの設立と活動」(2005年6月18日、2005年度歴史資料ネットワーク・シンポジウム、於：尼崎市立小田公民館)、報告：柳沢芙美子「福井豪雨における福井県文書館の活動」(2006年2月23日、全史料協近畿部会第81回例会「水害と史料保存対策について」、於：京大会館)。
- 2) シンポジウムの内容は、基調講演として松浦義則「2004年7月福井水害による史料被害と救済・保存」、パネルディスカッション(司会：澤博勝)に先立つパネリストの個別報告として長野栄俊「被災状況の現地調査活動、および史料の「現地保存」における問題点」、尾立和則「被災した資料の保存処置」、松下正和「2004年台風23号による水損歴史資料の保全・修復活動について」。
- 3) 「福井豪雨被災地における古文書等資料の救出のお願い」(福井豪雨被災地各教育委員会文化財担当者・資料所蔵者各位、文書館第180号)(<http://www.archives.pref.fukui.jp/fukui/08/200407fukuifl.html>)
- 4) [http://www.lit.kobe-u.ac.jp/macchan/fukui\\_suigai.htm](http://www.lit.kobe-u.ac.jp/macchan/fukui_suigai.htm)
- 5) 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会編『日本の文書館運動 全史料協の20年』(岩田書院、1996年)p.246～249。
- 6) 白井哲哉「民間史料から文書館・公文書館をとらえ直す 問題提起として」をはじめとする『地方史研究』第314号(2005年4月)の小特集「民間所在史料のゆくえ」を参照。また、新潟県において「現地主義」に基づく歴史資料調査保存活動を進める越佐歴史資料調査会の『地域と歩む史料保存活動(岩田書院ブックレット)』(岩田書院、2003年11月)も参考となる。
- 7) 沼弘『福井県の考古学史』(私家版、1985年9月)p.63～76「文化財保護と今後の課題」、『福井の文化財を考える 会報』第1～32号(1975年7月～1987年3月)などを参照。
- 8) 平野俊幸「福井県文書館の設置経過について」(『記録と史料』第12号、2002年3月)、他に注5)『日本の文書館運動』第3章「各地の史料保存の取組み」の福井県部分(p.161～162)も参照のこと。

